

日中文化交流、次のアイデアは？

中国語番組の配信会社「大富」社長 **張麗玲さん(40)**



「韓流」は一つのドラマが国と国の関係を好転させた。だから私は日本のいい作品を中国で紹介したい。アニメやドラマを中国のテレビのゴールデンタイムで放送していきたい。北京五輪が八月に開かれる二〇〇八年は「中国年」とも呼ばれる。ドキュメンタリー番組制作で脚光を浴びた女性はこの年にまた一つ、夢を追って動き出した。漫画やドラマで人気となっ

た「君の手がささやいてい」（縣部潤子原作）を、中国版ドラマとして完全リメイクし、十三億人の国に届けようという夢だ。聴覚障害者のヒロインと共に生きる夫や家族、友人たちとの葛藤を描いたストーリーは「中国の人々の心を打つ」との思いがある。中国には外国番組の放送に制限があるため、完全リメイクはこの壁を突破する狙いも兼ねる。

「日本を嫌いな中国人はいますが、日本に肌で触れると変わります。特に軍人は外国に出る機会が少ない。だから、日本を知ってもらいたかった」。そんな思いから昨年十月、人民解放軍交響楽団の初の日本公演（東京）を実現させた。イタリヤ歌劇、中国の伝統音楽、日本民謡、隣国の屈指の音楽家の演奏は好感が持たれた。靖国後遺症で、防衛庁（当時）

による〇五年の招請がキャンセルされた経緯もあり、妨害にも神経を使う難しい企画だった。

私費留学で来日したのは、天安門事件（一九八九）年六月の二週間後。当時は外貨交換の厳しい制限があり、「日本円は八千円ほど」しか持たずに入国。大

時代の肖像

13億人に心打つ映像を

う。だが、異国での生活は、言葉がでないために生きる条件すらうまく整わない。きついアルバイトで勉強時間を持てず、夢が破れていく。「人生がホロホロになり、その恨みが反日に重なった人もいた」。

苦勞する同胞の姿に、来日前は女優だった感性が騒いだ。「生き方を映像に残したい。上映できなくても十六人に上った。ドキュメンタリー「私たちの留学生生活」が中国全土でテレビ放送されたのは、一九九九年秋から二〇〇〇年春。熱狂的な支持の半面、インターネットには心ない非難も寄せられた。「あんなに日本人はいない」「日本政府に雇われたのか」。

日本では、フジテレビ（道内はUHB）で「小さな留校から逃げ、家族の「夢」を支えるため東京で不法就労する男性を十年間追ったシリーズ最終章「泣きながら生きて」（〇六年十一月）は、文化庁芸術祭の参加作品にもなった。今、外国人登録をしていない中国人は五十六万人で、「韓国・朝鮮」を抜き出身地別で一位になるのは時間の問題だ。微妙で複雑な溝を抱える日中関係だが、経済の相互依存は過去の歴史にないほどに進んでいる。「日本と中国では、考え方、価値観、信念、文化すべて違う。ぶつかるのは当たり前。違うことを再認識し、互いの文化を尊重することが大切だと思う」。

卒初任給が日本は約十六万円だったのに対し、中国は百円（約三千円）という格差があった。「あつころ中国は出国ブーム。私は二十二歳と若かったが、多くの留学生は三

十代でした。留学には借金が必要でしたから。十五年分（の年収）の借金をした人もいて……」

豊かさにあこがれ、「夢のためにすべてを懸ける勇気」が彼らにはあったとい

大学院を卒業し、東京で就職した九五年から、友人たちと撮影に明け暮れる日々を始めた。皿洗い、勉強、空腹、仕送り、不法就労、日本語が話せない小学生の涙、支える日本人……。友が友を呼び、取材した人は三百人以上、撮影した人は六

「大富」は、中国中央テレビと香港のテレビ局TVBの番組を、CSとインターネットを通し、日本全国に放送している。ニュース、ドラマ、語学、音楽などで、日本語字幕の番組もある。独自のニュース番組もあり、張社長は「私も取材に出かけています」

ワゴン車に現金を積んで乗り付け、超高級マンションを買いあさる金持ち。半面、カネがなく病院に行けない庶民もいる。祖国の貧富の格差にこんな事例で言及した。今年改革開放が始まって三十年。「長く貧しかった中国は一気に豊かになった」が、失ったものも多いという。来日して二十年目。多彩な活動を支えるのは失敗を恐れない「意志の強さ」にあるそうだ。

あとがき

あとがき

「大富」は、中国中央テレビと香港のテレビ局TVBの番組を、CSとインターネットを通し、日本全国に放送している。ニュース、ドラマ、語学、音楽などで、日本語字幕の番組もある。独自のニュース番組もあり、張社長は「私も取材に出かけています」

ワゴン車に現金を積んで乗り付け、超高級マンションを買いあさる金持ち。半面、カネがなく病院に行けない庶民もいる。祖国の貧富の格差にこんな事例で言及した。今年改革開放が始まって三十年。「長く貧しかった中国は一気に豊かになった」が、失ったものも多いという。来日して二十年目。多彩な活動を支えるのは失敗を恐れない「意志の強さ」にあるそうだ。

文・編集委員 佐々木政文 写真・東京写真課 加藤哲朗